

巻頭言

わたしからはじまる 「協同労働・よい仕事」は、 わたしを取り戻す営みでもある。

利根川 徳（協同総研専務理事）

3月1-2日に開催された「協同労働・よい仕事研究交流全国集会2025」は、この2日間の集会では「わたし」を主語に語り合い、他者との違いを認め合い、その先にある協同労働・よい仕事を探求して欲しいという古村連合会理事長の呼びかけで幕を開けました。

2日目の分散会では、組合員一人ひとりが個人レポート（よい仕事のエピソード、よい仕事を深めるために今後取り組みたいこと）を持ち寄り、「わたし」を出発点として、そこから「協同労働・よい仕事」へと向かう活発な意見交換が行われたと思います。参加者の感想文にも、「わたしからはじまる」ことへの共感が多数寄せられており、呼びかけが多くの組合員の心に響いたことを窺い知ることができます。

さて、「わたし」を出発点にするということの前提には、人間の本性への一定の信頼があると思います。例えば、人間であれば誰でも、目の前に困った人がいたら、「ほっとけない」「なんとかしなければいけない」といった衝動が起こるといったことです。

ところが、この「わたし」が揺らいで

いるのが現代社会の問題ではないかと最近思うことがよくあります。わかりやすいところでは、ネット上のフェイクニュースや印象操作に踊らされて、他者への誹謗中傷が行われたり、選挙の投票行動にまで影響を与えていたりすることがあります。より日常的な営みの中にも、思いもよらない罠が仕掛けられているかもしれません。

今話題になっている『テクノ封建制』（集英社2025.2.28）という本があります。著者のヤニス・バルファキスは、GAFAMをはじめとしたクラウド資本（巨大テック企業）の独占的な支配は、もはや利潤追求を原理とする資本主義でさえなく、レント（地代・使用料）を搾り取る「テクノ封建制」であると言います。封建制と呼ぶかどうかは議論が分かれるところですが、「監視資本主義」「プラットフォーム資本主義」「レント資本主義」など、西欧ではここ数年こうした資本主義の形態変化を指摘する言説が盛んに行われています。

私たちは日常的に、グーグル、アマゾンなどのデジタルプラットフォームを利用していますが、そこから個人情報や関心事、行動パターンなどを収集され、ア

ルゴリズムは私たちの興味関心や趣向を利用して、消費行動に向かわせるなどの意識変化をもたらします。単にモノを売りつけられるだけでなく、私たちがサービスを利用すればするほど、クラウド資本は自らを再生産し、強化していくような仕組みになっています。バルファキスによれば、「クラウド資本が人類にもたらした真の革命とは、何十億もの人々を、無償で労働するクラウド農奴へと変貌させたこと」です。クラウド資本は現代の封建領主であり、テクノロジーのユーザーである私たちはクラウド農奴であるということです。

なぜか日本ではこの問題についてあまり議論されませんが、日本にはクラウド領主になれるような巨大テック企業はなく、クラウド農奴への道しかないという厳しい現実から目を逸らそうとしているからかもしれません。

話を戻しますが、このような世界に生きている「わたし」は、「本当のわたし」なのでしょうか。自分の意識や価値観であると思っていることも、もしかしたらデジタル媒体との接触を通して歪められたものかもしれません。電車の中では、多くの人たちが一心不乱にスマホの画面を見ている光景に出会いますが、薄気味悪く感じるのは自分だけでしょうか。

よい仕事の出発点にある「わたし」には少し怪しいところがあることを意識した方がいいと思いますが、ここで大切なのが「協同労働・よい仕事」へと向かう

プロセスだと思います。ここでは、さまざまな「わたし」が出会い、他者との対話を通して「わたしたち」を形成していくことが期待されます。協同労働は多様な「わたし」をつなぐ装置でもあります。それでは協同する関係の中で、「わたし」にはどのような変化が生まれているのでしょうか。

集会のセッション第2部でコメンテーターを務められた堀田聰子教授は、現実にはいろいろな縛りがあって「ほっとけない」と思っても動けないことがよくあるが、協同労働の現場では、自分の感覚や感情に蓋をせずに解放して、他者の苦しみ突き動かされる人間的な応答(コンパッション)が起こっているのではないかとコメントされています。もしかしたら、わたしたちの「協同労働・よい仕事」には、他者の苦しみに反応し、ほっとけない「わたし」を取り戻す効果があるのかもしれません。狂気の時代と言われる今だからこそ、一人ひとりの「わたし」が正気を保つことがより重要になっているはずです。

バルファキスは、「テクノ封建制」を倒すための方法として、クラウド領主に対して利用を一斉に停止するなどのグローバルな行動を提案しています。

それに加えて、孤立分断させられている「わたし」たちのつながりを、地域をベースに取り戻す「協同労働・よい仕事」の取り組みを広げていくことを提案したいと思います。